

NEWS

Японо-Российское Общество Музыкантов

ЯРОМ**日本・ロシア音楽家協会（ヤロム）会報***Japan-Russia Society for Musicians*

CONTENTS

1. 会長あいさつ（岸本 力）	2
2. 特集「日本・ロシア音楽家協会創立40周年記念コンサート」	
・日本・ロシア音楽家協会創立40周年記念コンサートについて（志村 泉）	2
・記念コンサート特別委員として（福田 陽）	3
・「創立40周年記念コンサート」を終えて（岸本 力）	5
・「創立40周年記念コンサート」作品出品回想録（二宮 毅）	5
・40周年記念コンサートを終えて（関森温子）	5
・『壮大なスケールで魅力溢れる作曲家と音楽家たちの饗宴!!』	
～創立40周年記念コンサートを終えて～（佐藤勝重）	6
・ロシアから参加して感じた音楽の絆（蜷川絹子）	6
・創立40周年記念コンサートに参加して（浅香 満）	7
・記念コンサート・サポートスタッフとして（倉内秀典）	8
3. 愛知ロシア音楽研究会・2024年度活動報告（筧 聰子）	8
4. 特別寄稿	
・逆風のなかで聴いたコンサートのこと（小村公次）	10
5. 新入会員あいさつ（土田拓志）	11
6. 追悼	
・中山先生に感謝を込めて（小坂幸世）	12

1. 会長あいさつ

会長 岸本 力



日本・ロシア音楽家協会の皆様、お元気でご活躍の事と存じます。昨年は、大きなイベントとして、11月16日、めぐろパーシモンホール・大ホールに於いての「日本・ロシア音楽家協会創立40周年記念コンサート」を、無事に終える事が出来ました。今回、会員と事務局の献身的なご協力で、膨大な量の企画・運営を行い、大成功に導いてくださいました。しかし、事務局には大きな負担を掛ける事になり心苦しく思っています。特に前事務局長の久行敏彦氏、前事務局次長の高橋和歌氏らには改めて感謝とお礼を申し上げます。

ところで、新型コロナウイルスがやっと収束し、日本の音楽界も活気づいてまいりました。しかし世界では、まだまだロシアとウクライナの戦争は続いている、不安で心安まりません。一日でも早く解決し、穏やかな平和が再び訪れて欲しいものです。ロシア音楽の魅力を自由に伝える事が、我々の喜びです。そして、会員皆様が40周年記念コンサートを新たな始まりとして、当協会が創立時の魂を受け継ぎ、益々発展し続けられますように願い、私の挨拶とさせていただきます。

特集 2. 「日本・ロシア音楽家協会創立40周年記念コンサート」

日本・ロシア音楽家協会創立40周年記念コンサートについて

運営委員長・ピアノ 志村 泉

2024年11月16日に行われた「40周年記念コンサート」の準備は、その1年前にめぐろパーシモンホール 大ホールが土曜日に確保出来たことから、本格的に始まりました。

まず運営委員の中から有志によって特別委員会が設定され、3回の会合を重ねる中で、「4つの部会が合同で行うこと」「外部の方々の協力を得て弦楽合奏団を立ち上げ、協会の創立者である芥川也寸志さんの作品を演奏すること」などが定められました。今思えば、この時点でこれだけのコンサートを開催することがどれほど大変なことであるか、確実に把握している人はいなかったかもしれません。

全会員に参加の希望を募り、希望される方全員に出ていたことにしましたので、まず問題になったのは、あまりに長時間のコンサートになってしまふことでした。そのため12人出演する声楽部会は1人4分以内に、作曲部会では新作を発表する方は申告された演奏時間より数分ずつ短くするという、無理難題とも思える条件が出されました。器楽部会も2台ピアノなどのデュオ、また室内楽を入れるなど工夫しました。声楽部会のほとんどの方は、今回初めて器楽部会のピアニストの方たちの伴奏で歌われましたが、それぞれ素晴らしい共演となったことは、うれしいことでした。作曲部会の作品が、すべての聴衆に受け入れられるかということも心配したのですが、初めて現代作品を聴かれる方多かったはずなのに、客席全体に非常に集中して興味を持って聴いていただいている空気が感じられました。やはり新しい作品を生み出す作曲部会があることが、この協会の特徴もあり強みであると思いました。

もう一つの大問題は、かなりの経費がかかることでした。確かに大きな赤字が出たことは事実ですが、それは想定内のことと、そのぐらいかけて実現させようとした記念コンサートでした。ひとつ悔やまれることは、「創立40周年記念誌」を兼ねたプログラムを有料(500円)にしたために、多くの方の手に渡らなかった

ことです。チケット代を高くしても、プログラムは無料にすべきでした。非常に内容の濃いものになっていましたので、それは残念でした。今後の参考にしたいと思います。

500人近いお客様を動員することができ、4時間以上に及ぶ全プログラムをお聴きくださった方も多くいらしたようです。そして何より出演者の一人一人が、このコンサートに出演できる喜びを演奏に表していたと思います。

大きな山を越えて今思うことは、やはりこれからも各部会のコンサートを一つ一つ、充実させていくことが大切なことだということです。またコンサート以外にも、何か企画できることがあれば実現したいと思います。先輩の方々が積み重ねてきてくださった歴史を、引き継いでいくためにも、皆で力を出し合って行くことが大切だと思います。



創立40周年記念コンサートを開催する事が正式に決まつてから、運営委員会だけでは各種準備の処理をし切れない事が見込まれましたので、特別委員会が招集されました。メンバーは各部会より自薦・他薦された7名ほどです。私は作曲部会からのメンバーとして参加いたしましたが、主に携わった事柄について書き記す事にいたします。

まずは曲目の決定についてですが、協会創設者の1人でもある芥川也寸志氏の作品「弦楽のための三楽章」を取り上げる事にした一方で、各部会がそれぞれ会員に向けて参加希望者を募り、希望曲を挙げてもらった上で細かい調整をするという形で進めました。各部会でいろいろと調整をしていたはずですが、作曲部会について言うならば、演奏時間を短く出来ないかと相談したり、この編成の曲を書く人がまだ決まっていないので書いてもらえないかと頼んだり、芥川作品の脇を固める意味で弦楽オーケストラの曲を募集したり、という感じです。こういった調整の中で曲目が決まって行きました。

曲目がほぼ固まった時点で、個人的な話に属しますが、チラシのデザインを担当いたしました。頼み込まれるような形で引き受けたもの、プロのデザイナーではな

い身ですので、アイデアを得るのに多少の時間を要したのは仕方が無かったと思います。いろいろと検討してみた中で、芥川也寸志氏の写真と、もう一人の協会創設者であるT.フレンニコフ氏の写真が洋館の出窓に並べて飾られているというアイデアを思い付き、使えそうな写真を収集し、画像ソフト上で組み合わせ、さらに全体を絵画調に変換処理する事で何とか形にする事が出来ました。

そして、プログラム冊子の製作を担当いたしました。曲目解説は作曲者と学術部会の千葉潤さん、安原雅之さんに執筆をお願いし、プロフィールは演奏者本人に提出してもらいましたので、それ以外の協会の歩みや年表のページをまとめ、ヤロムの過去の記事から転載するものを選定し、全体を並べるという作業になりました。表紙は、チラシのデザインから不要な文字を省いた形で使用いたしました。

それでは、以下に当日演奏された全曲目を掲載いたします。全30曲に近い大プログラムです。なお、ほとんどの曲はYouTubeの日口のチャンネルに登録しておりますので、パソコンやスマートフォン等でご視聴いただけます。YouTubeにアクセスした後、「日本・ロシア音楽家協会」で検索してください。

プログラム

《第1部》

- | | |
|--|-----------------------|
| 1. ラフマニノフ：「ヴォカリーズ」 | Vc : 安田謙一郎、Pf : 志村 泉 |
| 2. メトネル：「遍歴の騎士」 Op.58-2 | Pf : 矢澤一彦、志村 泉 |
| 3. 二宮 豊：光の飽和（新作初演） | Pf : 石澤直子、横井玲子 |
| 4. チャイコフスキー：和解（諦念） Op.25-1 | Mez : 木村洋子、Pf : 小笠原貞宗 |
| 5. ショスタコーヴィチ：クロイツエル・ソナタ Op.109-5 | Sop : 川畠久子、Pf : 小笠原貞宗 |
| 6. ラフマニノフ：私はあなたを待っている Op.14-1 | |
| リムスキー=コルサコフ：オペラ「皇帝の花嫁」よりリュバーシャのアリア「主よ、罰したまえ」 | |
| | Mez : 松原広美、Pf : 野間裕美子 |
| 7. アレンスキー：春に Op.17-2 | |
| グリエール：心からの優しさに溢れて Op.6-3 | Sop : 関森温子、Pf : 野間裕美子 |
| 8. 福田 陽：ピアノのための「1楽章ソナタ」第3番（新作初演） | Pf : 松山 元 |

《第2部》

- | | |
|---|---|
| 1. ラフマニノフ：リラの花 Op.21-5、ここはすばらしい Op.21-7 | Sop : 宮上早智、Pf : 船橋泉乃 |
| 2. リムスキー=コルサコフ：オペラ「雪娘」より雪娘のアリア「女友達と木の実をつみに」 | Sop : 高橋和美、Pf : 松山優香 |
| 3. チャイコフスキー：オペラ「イオランタ」よりレネ王のレチタティーヴォとアリオーツ「神よ、もし私に罪があっても」 | Bas : 佐藤泰弘、Pf : 手嶋沙織 |
| 4. 島田 萌：雲の絶え間（新作初演） | Sop : 宮上早智、Cl : 川村慎敬、Va : 伊藤美香、Pf : 太田由美子 |
| 5. プロコフィエフ：サルカズム（風刺） Op.17 | Pf : 上野優子 |
| 6. リムスキー=コルサコフ：ピアノと木管のための五重奏曲より第1楽章 | |
| Fl : 日野真奈美、Cl : 川村慎敬、Hr : 今瀬康夫、Fg : 鈴木明博、Pf : 佐藤勝重 | |

《第3部》

1. 金田潮兒：《燕舞う》～2本のヴァイオリン、ヴィオラ、チェロの為の～
Vn : 蟹川紘子、高橋和歌、Va : 春木英恵、Vc : 斎田鉄平
2. スクリャービン：詩曲「焰に向かって」Op.72 Pf : 松山 元
3. スクリャービン：左手のためのノクターン Op.9 No.2 Pf : 村上弦一郎
4. カバレフスキイ：ヴァイオリンとピアノのためのロンド Op.69 Vn : 高橋和歌、Pf : 鶩宮美幸
5. リムスキー＝コルサコフ：預言者 Op.49-2 BasBar : 小原伸一、Pf : 船橋泉乃
6. チャイコフスキイ：オペラ「魅惑の女」よりクーマのアリオーソ「どこに慕わしい人は」 Sop : 小濱妙美、Pf : 小笠原貞宗
7. グリンカ：血潮は炎ように熱く燃えて、ムソルグスキイ：ホパック Mez : 天野加代子、Pf : 松山優香
8. グリンカ：オペラ「イワン・スサーニン」よりスサーニンのアリア「皇帝に捧げた命」 Bas : 岸本 力、Pf : 小笠原貞宗

《第4部》

1. 浅香 満：インドネシア幻想曲
2. 久行敏彦：風の詩 XI ～弦楽オーケストラのための～（新作初演）
3. 芥川也寸志：弦楽のための三楽章 Cond : 浅香 満、久行敏彦
- 1st Vn : 高橋和歌、蟹川紘子、友永優子、加藤えりな
2nd Vn : 浅井千裕、竹原奈津、大堀由美子、山本容子
Va : 春木英恵、伊藤美香、福田道子
Vc : 小泉ユミ、斎田鉄平、海野幹雄
Cb : 佐藤光俊

◎記念コンサート出演者



「創立 40 周年記念コンサート」を終えて

今回の記念コンサートが無事に終えることが出来ました事について、これまでの全体の企画・運営、そして当日リハーサル・楽屋割り・受付のご配慮など、事務局の方々に改めて感謝申し上げます。声楽部会の運営委員の皆様には、この企画に対して、小原伸一氏が中心に、事務連絡係を引き受けさせていただき、約 1 年半前から、運営委員会で話し合いを進めて参りました。今回の参加者の募集は、声楽部会全員にアンケートをとり、その結果、遠方の方々、そして多くの若い世代の方々が希望され、全員で 12 名になり、皆さんの当協会に対する熱意を嬉しく思いました。

また、伴奏ピアニストには器楽部会のご尽力で、8 名の方々のご協力を得て演奏させていただきました。遠くから

会長・声楽部会長・バス 岸本 力

も好意的にリハーサルに来て下さり、お陰さまで、それぞれが熱気に満ちた素晴らしいコンサートとなりました。また、第 1 部、第 2 部、第 3 部終了後には記念写真を撮り、華やいだ雰囲気で印象深いコンサートに終わりました。

後日、若い参加者から届いた、「大きなホールで歌う事が出来、貴重な体験になり勉強なりました！」という喜びの言葉が、協会及び会員皆様の今後の発展に繋がればありがたいです。



「創立 40 周年記念コンサート」作品出品回想録

作曲 二宮 毅

日本・ロシア音楽家協会の音楽団体としての特徴の一つは、西洋音楽における全ての分野・専門を網羅する会員を有することだと言え、これはそのまま最大の強みとも言えようか。通常は各部会に分かれた企画を展開しながらも、大きなタイミングにおいてはこれら部会の様々な連携による大掛かりな公演を可能としてきた。「創立 40 周年記念コンサート」はこれまでの活動の中でも随一の、協会が持つ組織機能を総動員した最大規模の公演事業であり、そこに自身が携われたことを、実施から半年が経過した今更にして誠に感慨深く思う。

作曲部会では出品者を募る段階で複数の編成が示されていて、自身は 2 台ピアノを選択しつつ、可能であればとの前提で当初は 8 手を提案した。より多くのピアニストにご出演いただきたいという幾らかお祭り気分の発想でもあったが、練習を含めた様々な調整の困難を考慮すると流石に無理があることから、早々に提案は引っ込みで 2 台 4 手に落ち着いたのが 2 月末。そこから作品の構想を練り始めた訳だが、自身としてのテーマは比較的早い段階で確定もしていた。コロナ禍以降の協会企画への出品作品には、社会の動向に居合わせてしまっている自身の立ち位置としての

時代性の反映を課してきたおり、殊に協会も憂慮するウクライナ戦争勃発後はそれが重く反映する陰鬱なテーマが続いていた。今回もそれを手放すものではなかったが、周年事業の華やかさをも反映させたい思いを絡め、困難への忍耐とその先の希望を描きたいと考えた。拙作タイトル《光の飽和》には、将来や未来は常に明るいものと表現され、また人類の発展は火を制御し闇を克服して繁栄してきた過程であり、しかしそこからは爆弾の放射する火球光や銃弾の軌跡たる閃光など負の光も生み出された現状を黙考しつつ、それでも光まぶしい未来へ希望を繋げたいとの思いを込めた。作曲技法的には自身の普段を逸するものでは無かったが、いつも以上にリズムや音の絡みが密となったことから、演奏のお二人にはさぞご負担をお掛けすることと内心で詫びながら楽譜送付することを今も思い出す。しかし石澤直子さんと横井玲子さんのアンサンブルは、拙作のさややかな意図をはるかに高い次元へと昇華させ、それを鮮やかな輪郭ある音響としてホールの空間へ現出させた。客席で聴いていた自身も、その次第に集中が昂ぶる音楽時間の渦に巻き取られる感覚に包まれ胸熱くしたことを、こうして原稿執筆しながら昨日のことのように思い起こしている。

40 周年記念コンサートを終えて

ソプラノ 関森温子

もう 20 年前になるでしょうか。入会した当時は音楽以外の芸術界隈重鎮の先生方が在籍しておられ、総会の際にはその凛としたお姿に歴史を感じて日口の伝統を実感し、ヒヨッコの自分の場違いさからビクビクしたものです。そんな私が思いがけず事務局のお手伝いを数年、遠藤雅夫前運営委員長・中島克磨前事務局長・小林久枝前事務局次長の下、いくつかのコンサートに携わらせていただきました。そのお蔭もあってコンサート運営、事務方の大変さは多少なりとも心得ているつもりでいましたが、今回の記念コンサートでの各部会の先生方、演奏家の方々のとりまとめ、プログラム作成、学術部会の千葉、安原両先生方の素晴らしいプログラムノート、また、当日の舞台進行に至るまでのご



苦労を拝察し、心からの感謝しかありません。

日口でのコンサートは約10年ぶりで、個人的には当会へご推薦くださった（2名の推薦が必要だったと記憶）、音楽学の故田村進先生、元運営委員で昨年亡くなられた師、平山恭子先生お二人への感謝の意を込め参加したのですが、8月に母を亡くし、9月には膝を骨折して舞台用のヒールも履けず、更にコンサート1週間前にはアレルギー劇症化で声が出なくなってしまったピアニストにもご心配をおかけし、恙なく舞台に載る事の難しさをこの歳になって改めて思い知りました。昔、ロシア人の師に「納得のいく演奏ができるのは人生の内で数えるほど。何が大切か、それはその時のコンディションの中で最善を尽くすことだ」と言われた言葉を思い出しました。私にとって原点に返るコンサートでもあったわけです。…当日の出来栄えがどうだったかは天国にいらっしゃる先生方にお聞きするほかすべはありません

んが、最善は尽くした、という事にしておいてください。

日口は珍しい作品紹介という意味深いコンサートを行っているので、出演する際には「ここでしか聴けない、味わえない世界があるのよ」と紹介しており、ご好評をいただいている。今回は4部構成だったので来場予定の方々が『最後までは居られないけど』との前置きでしたが、終演後「帰ろうと思っていたが珍しい作品ばかりで最後まで残った」と何人からもご感想をいただきました。これぞ日口音楽家協会、と私がほくそ笑んだのを皆さんもご賛同いただけるのではないでしょうか。

末筆になりましたが、ロシアの地にも日本に日口音楽家協会ありと知られるほどに両国の音楽家たちとの交流を通じて、様々なロシア音楽を引き続きご紹介する機会と会のご発展を念じております。

『壮大なスケールで魅力溢れる作曲家と音楽家たちの饗宴!!』

～創立40周年記念コンサートを終えて～

ピアノ 佐藤勝重

まずは、日本・ロシア音楽家協会創立40周年おめでとうございます。

私が協会に関わらせて頂いたのはこのうちの1/3くらいの年月ですから、本当にこれまで日本とロシア、二国間の音楽交流を続け、邦人の作品を意欲的に取りあげ発信し、また知られざる曲などを紹介したり、様々な活動にご尽力なされた協会の皆様の熱い想いに感銘を受けます。

私はこれまでにプロコフィエフ生誕120周年記念ピアノソナタ全曲演奏会や創立30周年記念ラフマニノフ生誕140年+1記念音楽祭など節目節目の年に演奏させて頂きました。



リムスキー＝コルサコフ：ピアノと木管のための五重奏曲のステージ写真

今回創立40周年と言う事で、ホールもキャパシティ1000人超えの普段あまり演奏する事のない規模で、響きは最高に素晴らしい、これまた曲もコルサコフ木管五重奏とレアな名曲を演奏できて、とても心に残る本番となりました。

恥ずかしながら今回の曲は存じ上げておらず、始めお話を頂いた時はコルサコフ？木管？となかなかピンとは来なかつたのですが、実際譜読みを進めて行くと曲の魅力にどんどん引き込まれ、初合わせの時はどんな音になるだろう？！とワクワク感が止まりませんでした。

共演させて頂いた方々とも初対面ながら、初回から和気藹々と楽しく意見を交わし、年代もバラバラな5人が1つの音楽に向き合い作り上げていくプロセスに、やはり音楽は良いなあ、音楽だから垣根を超えてできるんだよなあ、素晴らしいなあ、と心の底から感じる事のできた時間は今でも大切な思い出です。

今は世界で色々な困難な事がたくさんあり、簡単には解決できない問題が山積みですが、音楽こそ垣根を超えて無条件に誰にも邪魔されず全ての人々が共有できる世界共通のツールですので、これからもその“音楽”と言う共通ツールを操れる1人の人間として、何か人の心にメッセージが届けられるよう、日々精進して参りたいと思っています。

p.s. 今回は1楽章のみでしたが、また、機会があれば全楽章に挑戦したいと思っています!! (創立50周年??)

ロシアから参加して感じた音楽の絆

ヴァイオリン 蟹川絢子

このたびは、日本・ロシア音楽家協会創立40周年記念コンサートという大変貴重な機会に参加させていただき、誠にありがとうございました。普段ロシア人に囲まれて音楽に携わっている私にとって、日本人演奏家たちがロシアの作曲家の作品を情熱的に演奏し、ロシア語で歌曲を歌う姿

は非常に感動的で、同じ音楽家として誇らしく思いました。日本人の中にこれほどまでロシアの音楽と文化を愛する方々がいることに、深い喜びを感じました。

私は現在、ロシアの劇場でオペラやバレエ公演のオーケストラピットにて演奏しています。ロシア語が飛び交う職

場で、現地の音楽家たちと共に過ごす日々の中、とりわけチャイコフスキーをはじめとするロシアの作曲家の作品を演奏する際には、演奏者の熱量や誇りの強さを実感します。また、ロシアの人々は日本人に対して深い敬意を持って接してくれますし、責任感や時間に対する意識など、文化的な共通点も多く、非常に働きやすい環境だと感じています。

劇場の公演は常に満席で、開演前には多くの人が劇場前に集い、写真を撮ったり、談笑したりと、特別な時間を楽しんでいます。特に年末年始の『くるみ割り人形』は恒例行事で、チケットはどれほど高額でも必ず完売します。バレエやオペラが人々の生活の中に自然と溶け込み、愛されている様子を目の当たりにするたび、日本人の私も幸せな気持ちになります。

ロシアで演奏活動を始めたきっかけは、友人の紹介で劇場のコンサートマスターのオーディションを受けたことでした。ありがたいことにそのご縁がつながり、現在の活動に至っています。また、日本・ロシア音楽家協会には、高

校時代の恩師のご紹介を通じて参加させていただくことになりました。今後も、自分自身の経験を通じて、日露両国の音楽文化交流に微力ながら貢献していけたらと願っております。



金田潮兒：《燕舞う》～2本のヴァイオリン、ヴィオラ、チェロの為の～のステージ写真

創立 40 周年記念コンサートに参加して

作曲・指揮 浅香 満

2024年11月16日に開催された「日本・ロシア音楽家協会創立40周年記念コンサート」に参加させていただきました。当日は「出品者」として同時に「演奏者」でもありましたので作曲部会会員を代表するのではなく、ここでは極めて個人的な「想い」を語らせていただくことをお許しください。

まずは、福田陽作曲部会長と弦楽オーケストラのコンサートマスター(ミストレス)であり運営、演奏両面の「要」であった高橋和歌氏に心からの敬意と謝意を表明したいと思います。ご自身の新作発表、重要な演奏も控えている中で私のような(そしておそらく私以外にも多数いたであろうと想像できる)全体の状況が見えていないにもかかわらず好き勝手な発言をする会員を宥め、見事に成功に導いてくださったのは高潔な人格の成せる業であると言えましょう。また、高橋氏は弦楽オーケストラのメンバーにパート譜を送付される際に、ちょうどプログラムに掲載していただいたこの作品に対する私の「想い」も共有できるようにしてくださり、それは最初のリハーサル時から一音、一音に魂の乗った表現として反映されメンバー一人一人がいかに素晴らしい奏者であるのかを大いに実感させられたものです。そしてリハーサルでは皆様から適切なご質問、ご意見をいただき、効率の良い練習ができました。それにもかかわらずこの壮麗な響きを完璧にまとめ切ったと言い難いところに私の力不足も痛感することとなりました。

さらに、ご自身が優れた作曲家、アーティストであるのにもかかわらず当日は出品、演奏をなさらず「裏方」に徹して会を支えてくださった献身的な会員の存在も忘れることができません。多くの心ある方々に支えられ当日の本番は勿論のこと、そこまでに至る「40年」の歩みの中にプログラムの活字にも載らず拍手を受けることもない謂わば「伴奏」のような役割を肅々と果たしてくださった皆様がいらっしゃ

しゃらなかつたら輝かしい歴史は刻まれることができなかつたことでしょう。

「パーシモンホール」でのコンサートはいつも特別な感情に見舞われます。と申しますのは、この会場のある周辺の町(2度ほど引っ越ししましたが柿の木坂～八雲町)で実は私は高校時代までを過ごしました。最寄りの東急東横線「都立大学」はこれまで最も多く利用した駅の一つとなっております。ホールのオープニング時、「パーシモン」という名称が「柿の木坂」からの由来であることは説明を読まずとも容易に想像できました。本番前の時間に母校である八雲小学校、目黒第十中学校にも足を運んでみましたが、校舎は新しくなっていたものの至る所に当時の面影、雰囲気がそのまま残っており懐かしい感覚が蘇ってきました。私がかつて住んでいたボロ家は近代的な住居に生まれ変わっており周辺も当時より洗練された街並みに姿を変えておりましたが、中には昔のままのアパートや、特に旧友の家にはそのまま「同じ表札」が掛かっており、思わず呼び鈴を押したくなる衝動に駆られました。

その住所が以前と変わっていない同級生数名にコンサー



トの案内を出しましたところ何人かに来ていただくことができ、中には半世紀ぶりの再会となった懇親会もありました。

現在、教壇に立つ（音楽学校ではありません）立場の身として生徒、学生たちに「楽譜が読めることは義務教育時代に習得しておくのが当然」と偉そうに語っておりますが、当の本人は実は中学1年生の時まで楽譜を読むことができませんでした。幼少のころから英才教育を受けているケースが多いこの業界の中で、私がピアノを習い始めたのがちょうどこの頃です。「楽譜が読めない」とんでもない生徒に忍耐強くご指導くださったピアノの師匠は「ピアノ」のみならずこの音楽の世界に足を踏み入れる原点を構築（この師匠なくして今の私はいません）してくださいましたので、師匠からいただいたあたたかい言葉は何よりの励みとなりました。かなりご高齢のはずなのですが、当時と変わらぬ若々しさ、エネルギー、パワーに満ち溢れ中学生時代に最初にお目にかかった頃の「輝き」を維持されていることに尊敬の念を新たにいたしました。

高校の所在地はこの近くではなかったのですが、進路面で様々な貴重なアドバイスをいただき就職の面でも大変お世話になった音楽担当の先生は現在もこのパーシモンホールの近くに住んでおられ・・・と言うか、実は我が家はこ

の先生の「通勤経路」上にあり、高校入学早々、朝、家を出たら目の前をその先生が歩いていらしたこと驚かされたものです。以来、作曲がご専門で数々の美しい歌曲を書かれている先生には音楽の雑談から将来の進路に至るまで親切に相談に乗っていただいたものです。現在、90歳になる健脚の恩師は当日も後方客席から手を振ってください、何とも言えない感覚を噛み締めることができました。

このように「パーシモン」とその周辺には「懐かしさ」が満ち溢れおり、それは単に記憶の中に仕舞い込まれているのではなくコンサートによって呼び覚まされるものとなっています。「懐かしさ」とは経験と記憶によって齎される最高に美しい精神のハーモニーから生まれると見えましょ。今回のコンサートは日本・ロシア音楽家協会の「40周年」の歩みを振り返り総括するのと同時に、私個人の振り返りでもあり、総括でもありました。

無限に存在する「音」を作曲家の心が掴み取って美しい旋律やハーモニーを構成するのと同じように人間それぞれの存在が「音」のように集合し、歴史を刻み、「調和」を奏でます。当日は日本・ロシア音楽家協会の皆様の美しい心と、これまで私を支えてくださった恩師、友人たちとの最高の「調和」を堪能した至福のひと時でした。

記念コンサート・サポートスタッフとして

創立40周年記念コンサートの成功、おめでとうございます。私は財務担当、受付担当として、このコンサートのメンバーとして参加させていただきましたが、収支報告書を提出して、あらためてホッとしています。

企画から準備まで、スタートは実行委員の方々がなされたのですが、特に高橋和歌さんの尽力には大きなものがありました。財務についても予算計画から当日の実務まで、ご自身も演奏者でありながら遂行いただき、感謝に尽きません。

会員の皆様、会費の早期納入にご協力いただき、ありがとうございました。日本・ロシア音楽家協会は会員のみなさまの会費によって支えられていることを痛感し、感謝の意を表したいと思います。残念ながら、コンサート会場にはいらっしゃることができなかった方々の、支援も感じました。

私が言うのもおこがましいのですが、創立者である芥川

財務部長 倉内秀典

也寸志さんも喜んでいただける創立40年の記念コンサートになったと思います。

今回の受付は7人体制とし、早くから会場に集合、地震等災害時の対応、お客様・出演者の救急看護もホール側と連携がとれるようにしました。受付スタッフはとても楽しくコミュニケーションがとれるメンバーで、特にプログラムの販売については、連携してお客様にお声をかけ、来場時だけでなく、休憩時、お帰りの際にも買っていただきました。

ステマネの今瀬良介さんはじめ、私たち裏方スタッフにもやりがいのある記念コンサートになりました。

創立50周年に向けて、日本・ロシア音楽家協会の活動をさらに力強く進めて行きたいと、あらためて思っています。

3. 愛知ロシア音楽研究会・2024年度活動報告

メゾソプラノ 篠 聰子

「愛知ロシア音楽研究会」2024年度は例年どおり2回の演奏会を開催致しました。定期公演は5月24日に第15回演奏会「世紀末のサンクトペテルブルグ」とのタイトルで19世紀末のサンクトペテルブルグの音楽界に焦点を当て、国民楽派「ロシア五人組」とその流れを汲む作曲家たちを取り上げました。サンクトペテルブルグではこの当時、聖イサアク教会をはじめ現在もこの街の名所となっている建

築物の多くが建設され、また芸術においてはパトロンとなつた大富豪が出現していた時代です。今回はその中の一人ミトロファン・ベリヤーエフに焦点を当てました。彼は「ロシア五人組」の音楽に惹かれ、自分もアマチュアでヴィオラを弾いていました。また、豊かな家庭では家庭音楽会が開催されるようになり、当時に思いを馳せながら、同時期にサンクトペテルブルグで欧風趣向の音楽を作曲していた

A. アレンスキーの曲をご紹介しようと、少し欲張りなプログラムを組みました。

キュイ、グラズノフなどの後に演奏した2台ピアノによるアレンスキーの組曲は、2曲とも華やかで国民楽派とは対照的な曲調。相反する音楽が楽しめたとの感想が届けられました。プログラム最後には家庭音楽会で演奏されたであろうチャイコフスキーの「6つの二重唱」から5曲を選びました。来場者の方々からは、2台ピアノのための曲、様々な声種の組み合わせの二重唱曲集など変化に富んだプログラムで、魅力的なコンサートだったと嬉しい感想をいただきました。



愛知ロシア音楽研究会第15回演奏会「世紀末のサンクトペテルブルグ」の出演者

プログラム「世紀末のサンクトペテルブルグ」

《第1部》

- | | |
|--|----------------------|
| ・アレンスキー 「2台のピアノのための組曲 第2番 《シルエット》」 op.23 | 1st. 松下寛子 2nd. 佐藤恵子 |
| 1. 学者 2. コケットな女 3. 道化 4. 夢見る人 5. バレリーナ | |
| ・グラズノフ 「私たちは丘の麓に住んでいた」「あなたの目と私の目が合う時」 | Mez. 木村洋子 Pf. 五島史誉 |
| ・グラズノフ 「ミューズ」「ニーナの歌」 | Sop. 篠真美子 Pf. 佐藤恵子 |
| ・グラズノフ バレエ音楽「四季」 op.67 より《小さなアダージョ》 | Pf. 吉永哲道 |
| ・チェレブニン 「秋の歌」「水の上には安らぎが」 | Sop. 川畠久子 Pf. 渡辺理恵子 |
| ・アレンスキー 「2台のピアノのための組曲第1番」 op.15 | 1st. 五島史誉 2nd. 渡辺理恵子 |
| 1. ロマンス 2. ワルツ 3. ポロネーズ | |

《第2部》

- | | |
|----------------------------------|----------------------------|
| ・リヤードフ 「音楽の玉手箱」 op.32 「舟唄」 op.44 | Pf. 丸山晶子 |
| ・グラズノフ 「アラビアのメロディー」「美女」 | Bas-bar. 鈴木健司 Pf. 松下寛子 |
| ・グラズノフ 「汝が真白き胸に」「夜鶯」 | Sop. 金原聰子 Pf. 松下寛子 |
| ・キュイ 「あなた」と「貴方」「願い」 | Mez. 篠聰子 Pf. 佐藤恵子 |
| ・アレンスキー 「ピアノ三重奏第1番 第1楽章」 op.32 | Pf. 武内俊之 Vn. 江頭摩耶 Vc. 野村友紀 |

《第3部》

- | | |
|--|-----------------------------------|
| ・キュイ 「5つの小品」 op.56 | Fl. 篠孝也 Vn. 江頭摩耶 Pf. 五島史誉 |
| 1. バディナージュ 2. 子守唄 3. スケルツィーノ 4. ノクターン 5. ワルツ | |
| ・グラズノフ 「牧歌」 op.103 | Pf. 吉永哲道 |
| ・チャイコフスキー 「6つの二重唱」 op.46 より | |
| 1. タベ | Sop. 篠真美子 Mez. 木村洋子 Pf. 佐藤恵子 |
| 2. スコットランドのバラード | Sop. 川畠久子 Bas-bar. 鈴木健司 Pf. 渡辺理恵子 |
| 3. 淚 | Sop. 金原聰子 Mez. 篠聰子 Pf. 佐藤恵子 |
| 4. 野菜畠の浅瀬の近く | Sop. 川畠久子 Mez. 木村洋子 Pf. 五島史誉 |
| 6. 夜明け | Sop. 金原聰子 Mez. 篠聰子 Pf. 佐藤恵子 |

年末には恒例の「ロシア民謡万華鏡 2024」を12月14日に開催しました。今回はこれまでにない珍しいピアノ曲、F.X.W.モーツアルト「ロシアのテーマによる変奏曲」、このモーツアルトはかの有名なウォルフガング・アマデウス・モーツアルトの末子（四男）。澄んだ音色でちょっと神経質な感じのかわいい曲でした。

練習曲集で有名な作曲家 C. チェルニー（4手）「ロシア

民謡（赤いサラファン）による変奏曲」、L. ベートーヴェンによるバラニツキーのバレエ「森の乙女」のロシア舞曲の主題による変奏曲 WoO71。以上3曲は楽譜が入手出来たためプログラムに載せることが出来ました。演奏のほか、19世紀ヨーロッパにおいてロシア民謡を取り入れた曲が作られた状況など、興味深い安原雅之氏の「お話」が演奏会を聴いていただく手助けとなりました。

プログラム

- トロイカ（民謡）
- 「50のロシア民謡」より（チャイコフスキイ）
 - No.5 溢れないで、私の静かなドナウ
 - No.10 浮いて、上がって
- No.23 アヒルが海で泳いでいた
- No.24 私のおさげ髪をネットカチーフで巻いて
- No.44 都会のお姫様のように
- No.47 ヴァーニャは座っていた
- No.49 ヴォルガの舟歌
- 道（ノヴィコフ） 私を叱らないで（デュビュク）
- 「ロシアの民族舞踊」第一巻（全6曲）（グレチャニノフ）
 - 1. 私の庭にありますか
 - 2. 野に立つ白樺の木
 - 3. 小石の下から
 - 4. ポケットの中
 - 5. 農民の踊り
 - 6. ああ、山に桜の木が、桜の木が
- 行商人（民謡） ステンカ・ラージン（民謡）
- 「6つの小品」（アミーロフ）
 - 1. アシュグの歌
 - 2. 子守歌
 - 3. 舞曲
 - 4. アゼルバイジャンの山脈で
 - 5. 泉にて
 - 6. 夜想曲
- [お話]「19世紀のヨーロッパにおけるロシア民謡」
- ロシアのテーマによる変奏曲（F.X.W.モーツアルト） 嵐の時の子守歌（ピアノ編曲版）op.54-10（チャイコフスキイ）
- ヴラニツキーのバレエ「森の乙女」のロシア舞曲の主題による変奏曲 WoO71（ベートーヴェン）
- 嵐の時の子守歌（チャイコフスキイ） もえよ、もえよ私の星（ブラーホフ）
- 暗桜桃色のショール（民謡） 赤いサラファン（ヴァルラーモフ）
- ロシア民謡（赤いサラファン）による変奏曲（チェルニー）
- ♪会場の皆様とご一緒に
- 小さいグミの木 カチューシャ 果てもなき荒れ野原

このように2回の演奏会を無事に終えました。プログラムを組むにあたって、アンサンブル曲は今後ともレパートリーの一環として演奏していくと考えています。また企画はしたが楽譜が手に入らないことがあるため、まず楽譜の有無を確認することを心がけています。

ありがたいことに、当会への応援団が少しずつ増え、ロシア音楽に興味を持つ方も増えてきています。次回開催は、2026年5月15日（金）「ロシア 異国趣味・オリエンタリズム」です。

特別寄稿 4. 逆風のなかで聴いたコンサートのこと

ミュージック・ペンクラブ・ジャパン会員 小村公次

日本・ロシア音楽家協会のコンサートを初めて聴いたのは、2022年3月10日にカワイ表参道コンサートサロン「パウゼ」で開かれた「作品交流シリーズ Vol. 3 現代ロシア音楽&日本現代音楽」だった。あの時はロシアによるウクライナ侵攻が始まった直後だったこともあり、“ロシア”的

イメージは最悪になっていた。実際、私自身もコンサートに行くことに躊躇する気持ちがなかったわけではない。しかし、このコンサートを聴いたことで、音楽の新しい知見に接することができたのは大きな収穫だった。

ひとつは、演奏に先立って行われた千葉潤さんの講演「現

代ロシア音楽：アヴァンとレトロの間で」で、“現代ロシア音楽”の歴史的パースペクティブというものがよく理解できた。特にフィリップ・ヘルシュコヴィチ（1906-1989）というルーマニア出身の作曲家で音楽理論家が1940年から1987年まで旧ソ連に在住し、新ウィーン楽派の語法をロシアにもたらしたこと。そして戦後の「雪どけ時代」に、旧ソ連の音楽界では「古楽の発見」があったということ。これはシュヴァイツァーの著作『バッハ』が20数年ぶりに再刊され、その影響もあって、当時エストニアで活動していたアルヴォ・ペルトが古楽に目覚め、彼の特徴である「ティンティナブリ様式」を確立したことだとか、古楽団体「マドリガル」が1965年に設立されたことなどが紹介された。さらに、こうした「雪どけ時代」に西欧の前衛音楽に目覚めたロシアの作曲家たちは、その後前衛主義からの自発的な方向転換を行うようになったという。その理由は、十二音技法も結局は「管理された音楽」であるということなど。

講演の結びで千葉さんは、ソ連崩壊後の現在のロシアでは文化芸術は不毛の状態になっており、本来「ソ連」という制度は多民族社会であり、それが社会に活力をもたらしていたが、現在のロシアにはそれがない状態であるとのことで、聞きながら現在進行中の事態と重なるものを強く感じた。

もうひとつの収穫は、ピアニストの志村泉さんが演奏したウクライナの作曲家ヴァレンティン・シルヴェストロフ（1937年生まれ）の「使者」（1996）という作品を聴いたことだった。この作曲家のこととはそれまでまったく知らなかったのだが、演奏が始まると、その清冽な響きに深く魅せられた。それは今まで聴いたことのない響きの音楽で、「こんな音楽があったんだ」という深い感慨を覚えた。

この日演奏された7作品のうち、3作品が“現代ロシア音楽”だったが、シルヴェストロフのほかは、旧ソ連時代、“反体制派”作曲家として知られたエディソン・デニーソフ

（1929-1996）と、彼の弟子でもあるウラディミル・タルノポリスキ（1955年生まれ）で、彼はウクライナ生まれのロシア人作曲家である。つまりこの3人の顔ぶれというものは、“ロシア”という言葉では単純に括ることのできない現代作曲家であることを強く感じた。

このコンサートで初めて出会ったシルヴェストロフという作曲家のこととは、ウクライナでの戦争が激しくなるとともにますます身近な存在となっていました。2022年3月27日には、ベルリンのベルビュー宮殿（大統領官邸）で行われた「自由と平和のためのコンサート」で、ベルリン・フィルのメンバーが沖澤のどかの指揮で彼の弦楽合奏のための「沈黙の音楽」（2002）より第2楽章「夕べのセレナード」を演奏したが、その中継動画を見ていたら、客席にシルヴェストロフの姿があった。そのあと、3月30日付のニューヨーク・タイムズ紙には「ウクライナで最も有名な存命の作曲家が難民となる」という見出しで、彼と彼の家族がキエフの自宅からバスでリヴィウへ避難し、そこからポーランドを越えてベルリンへと向かったことが詳しく報じられていた。さらに、同年5月1日にはNHKのEテレ番組「今こそ平和の響きを～ウクライナ侵攻 芸術家たちの鬨い～」で、シルヴェストロフとのインタビューが放映され、難民となってなお、作曲家として作品を書き、演奏している様子が詳しく報じられた。

このように、3月10日のコンサートで志村泉さんが弾いたシルヴェストロフの「使者」という作品を聴いたことが発端となって、シルヴェストロフと深い絆で結ばれていたのである。それだけに、逆風が強く吹いていたあのとき、あのコンサートを聴いたことは、やはり大正解だったと思う。こうした未知の音楽との出会い、未知の作曲家との出会いは、やはりかけがえのない重要な機会であると思う。その意味からも、日本・ロシア音楽家協会の活動がこうした分野でもますます活発になっていくことを切に期待したい。

5. 新入会員あいさつ

土田拓志（バリトン）

日本・ロシア音楽家協会に入会させていただきました土田拓志です。推薦していただきました岸本力先生に心より感謝申し上げます。

さて、ロシア音楽に触れてまだ日の浅い私ですので、この度は簡単な自己紹介と今後の意気込みを書かせていただきます。

私は秋田県の湯沢市という豪雪地帯の生まれです。小学4年生のときに吹奏楽部に入部し、中学、高校と9年間ユーフォニアムを吹いていました。大学は山形大学の音楽芸術コースに声楽専攻として進学し、イタリアオペラやドイツリートを練習する日々を過ごしていました。大学院卒業を控えた時期にムソルグスキーの歌曲集「死の歌と踊り」を聴き、雷に打たれたような衝撃を受けました。それ以降高校の教員として働いている今でも、ロシア声楽作品の勉強をライフワークとしています。

今後は、ロシア文化の理解を深めたいと考えています。音楽だけでなく言葉、歴史、文化など多角的にロシアを捉えて深みのある作品を再現したいです。また、声楽家としてロシア詩の作詩法から生まれる音楽の可能性を研究していきたいです。

最後になりますが、混沌とした世界情勢の中、日本・ロシア音楽家協会の一員となった今、私は一体何ができるだろうと日々考えました。しかし、そのように悩むよりもロシアの音楽を愛したのなら、信念を持って命尽きる日まで歌うことが大切なではないかなと思います。まだまだ若輩者ではありますが、歴史ある協会の中で真摯に取り組んで行くことを決意し、終わりの文とさせていただきます。

今後ともどうかよろしくお願ひいたします。



中山先生に感謝を込めて

ピアノ 小坂幸世



昨年7月12日、長年常任指揮者でいらした中山英雄先生が亡くなられ、横浜の合唱団「道」は共に根を張ってきた大樹を失い、私達は深い哀しみに包まれました。

ロシアの歌、ウクライナ、バルト3国の歌を殆ど知らない私が中山先生の下で毎週水曜の夜に伴奏を始めたのは、30年前のことでした。中山先生への感謝と思い出は限りなくあり、言い尽くせないのですが少しだけ記させて頂きます。

アコーディオンがご専門で編曲家でいらした先生は、毎週魔法のようにご自身の編曲によるロシアの合唱曲を私達に提供してご指導下さいました。小品はシューベルトの歌曲のように、時には暗く重く、時にはブラームスのような美しく情熱的なメロディーに私はあっという間にその魅力に引き込まれ、心が躍りました。

合唱団の3度のロシア演奏旅行の時には、毎朝中山先生はバスの中で何かしら面白いギャグを飛ばして私達を大笑いさせて下さり、見知らぬロシア人のお客様の前で演奏する時もいつも穏やかな笑顔の指揮の下、私達は安心して演奏する事が出来ました。日本人墓地の前や、バイカル湖の船上でアコーディオンを弾いて下さり、自ら大きな声で歌われました。

また合宿の時は夜遅くまで先生のアコーディオンで色々なジャンルの歌が歌え、なんと贅沢な時間だったか改めて思い出します。そして全曲、全調で弾ける先生は素晴らしいと感激しました。ベートーヴェンも、チャイコフスキーもロシアのメロディーを楽曲に用いたこと等を教えて頂き、尚更ロシアのメロディーに親しみを感じましたし、その後ロシアからのシューベルトへの楽曲依頼（アレクサンドル1世の逝去に寄せたピアノ連弾曲♪大葬送行進曲ハ短調とニコライ1世の戴冠式のための♪英雄的大行進曲イ短調）や編曲の依頼があった事、ロシアの音楽文化に影響を受け、それへの関心を抱いた事を知りましたし、難しいと思っていたロシアの音楽と有名な作曲家との繋がりに少しづつ私の理解と想像が点と点として結ばれ、線となり自由に広がっていきました。私がロシアに勉強に行く度に、ラフマニノフの実家は広大な領地の中に立派な館・川も流れていた事に驚嘆した事や、チャイコフスキーの居間にモーツアルトのオペラの楽譜がぎっしり並んでいた事に感激し、中山先生にお話し報告すると先生はいつもニコニコと私の話に耳を傾け喜んで聞いていらっしゃいました。音楽がただ好きだけの私に、作曲家の関心や編曲の深さを間近で教えて下さり、私の人生にかけがえのない宝物になりました。先生はロシアで出会った演奏家の話にも耳を傾けられ、来日された巨匠や若き演奏家にも誠実に謙虚に接するお姿から私は多くを学ばせて頂きました。人と人との文化交流に大きな功績を積まれた事に尊敬と感謝の気持ちでいっぱいです。

中山先生は沢山のロシアとウクライナの合唱曲の編曲（5冊の歌集）を私達に残されました。私はロシア民謡の研究の第一人者でいらした中山先生の足跡を今後も辿って精進して参りたいと思います。中山先生、本当に長年の御指導ありがとうございました。いつかロシアの音楽の楽しいお話をまた聞かせてください。

日本・ロシア音楽家協会編集部 発行日 2025年7月14日

発行人：岸本 力 編集者：福田 陽、大場晶子、森垣桂一

〒130-0021 墨田区緑3-19-5 すみだチェリーホール方

E-mail : japanrussiasfm@gmail.com <http://japan-russia-sfm.net/>